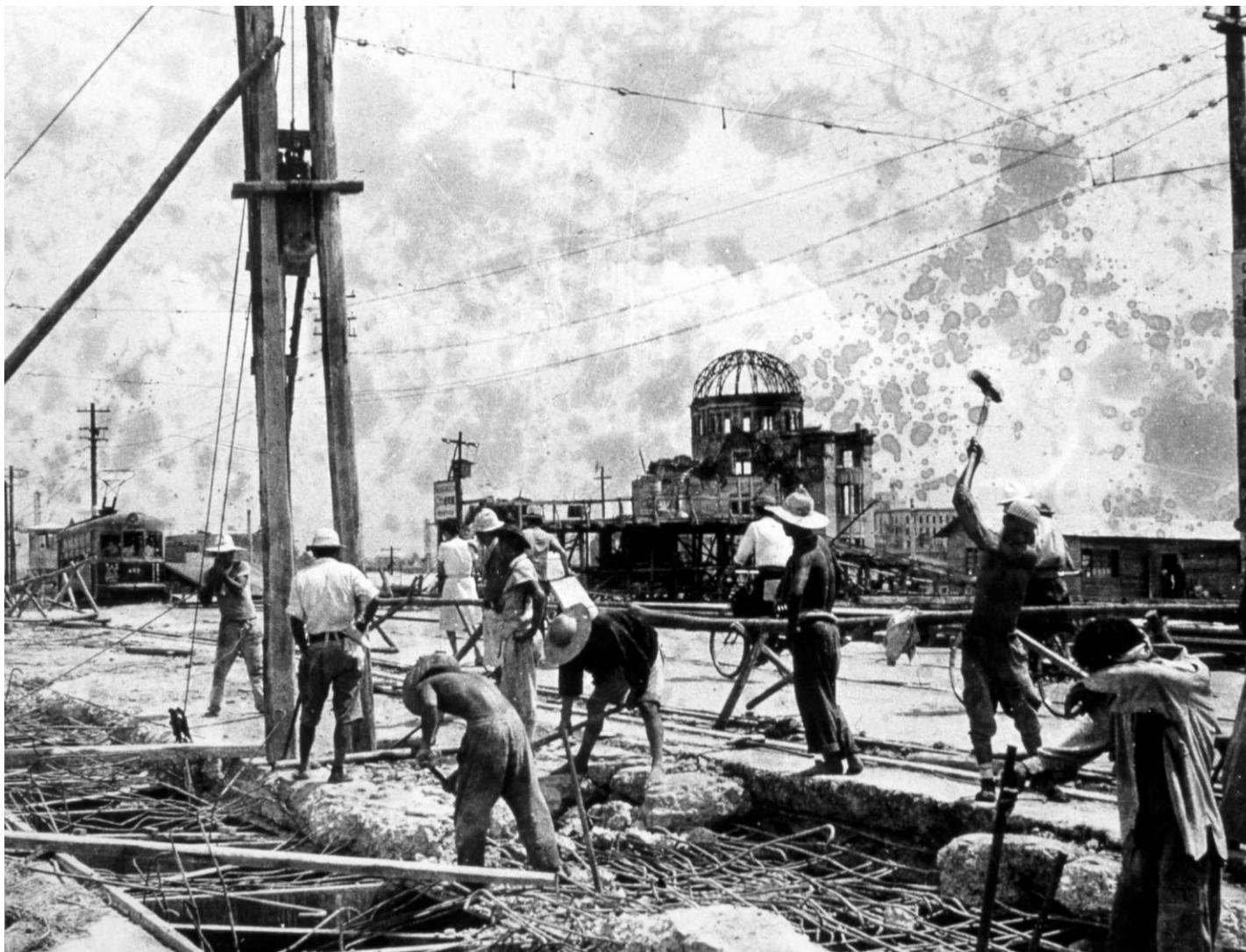


第5章 戦後の広島



5-01 相生橋の復旧工事 1949年

廃墟の中での市民生活



5-02 廃墟からの出発

手前の道筋は、広島の大繁華街だった中島本町（現在の平和記念公園）へ延びる本通り商店街。左端は本川国民学校、その前はまぼ爆発直下のため倒壊を免れた広島郵便局の電信塔、右は産業奨励館（原爆ドーム）
1945年12月

広島市初の公選市長に1947（昭和22）年に就いた浜井信三は被爆時、市の配給課長でした。全焼した鉄筋市庁舎で寝泊まりもして「郡部から運んでくれる握り飯と乾パン」の配給に当たり、終戦詔書が天皇の声によりラジオ放送された1945年8月15日以降は「焼け残った諸部隊の食糧、備品、消耗品などをもらいに行った」と書き残しています。

さらに壊滅翌月の9月17日に襲来した枕崎台風（広島県内の死者・行方不明者は2,012人）では、市中は「一面の湖だ。ガレキや種々なガラクタがすべて、水の底に隠されてしまった。これで一切切、徹底的に葬り去られたような気がした」と戦後10年に書いた「広島市政秘話」で振り返っています。

1945年11月の市の調査で人口は被爆前の約3分の1になっていましたが、13万7,197人が焼け残った周辺部で露命をつないでいました。広島戦後と復興は未曾有の混乱のうちに始まったのです。

●応急復旧

瞬時に壊滅し廃墟の街となった広島市の復興は、鉄道・電車などの輸送機関、水道、電気などの応急的な復旧から始まりました。

・ 道路では、通行できるエリアを確保するためガレキの除去等が行われました。爆風により落ちた橋もありました。残った橋については欄干の修復や橋の補強も進められましたが、9月17日の枕崎台風で被害を受け、全ての橋の復旧が完了するには日数を要しました。

・ 広島デルタを結ぶ市内電車（路面電車）は、乗務員にとどまらず車両や軌道、電柱・電線等の被害が大きかったものの、被爆3日後の8月9日、己斐－西天満町間が単線で運転を再開します。8月18日に広電本社前－宇品（終点）間が開通し、9月12日には紙屋町間までつながり、10月11日に広島駅－己斐間が全線単線で開通しました。



5-03 紙屋町交差点付近の路面電車の復旧作業 1945年10月

・ 鉄道は広島駅の被害が大きく、被爆当日は、被害の少なかった周辺の駅で折り返し運転を行いました。8月7日に宇品線が、8日には広島－横川間が単線で開通して山陽線は復旧します。9日には芸備線の広島駅発着が可能となりました。復旧した列車により負傷者が運び出され、家族や知人らの捜索・救援に向かう人々を乗せて走りました。

・ 水道は、基町にあった庁舎が大きな被害を受けたものの、牛田の浄水場の被害は少なかったため、応急的な修理を行い、6日夜には予備のポンプを動かして断水を食い止めました。10日には本格的な送水を開始しましたが、水道管の破損などにより各所で漏水が発生しました。漏水防止作業を進め、全市域の周辺末端で水が出始めたのは、翌1946年4月のことでした。

- ・ 電気では、小町の中国配電（後の中国電力）本店の被害は大きかったものの、周辺には被害の少ない変電所があったため、7日から復旧作業を行い、8日には焼け残った宇品方面に送電を開始しました。電線や電柱の修理も並行して行い、8月20日には残存する家屋の3割が点灯し、11月末には全被害地域の復旧が完了しました。
- ・ ガスは、爆心地近くの大手町にあった広島瓦斯本社が全壊し、皆実町にあった主力の広島工場も壊滅しました。被害の少なかった市内南部での復旧を優先し、1946年4月11日宇品町、翠町等の235戸への供給を再開しました。



5-04 中央の曲がった鉄骨は市水道部基町庁舎建物。市内電車の八丁堀-左官町（現本川町）間は9月7日に復旧したが、被爆電車は放置されていた 1945年10月上旬

●暮らしの再建

生き残った市民は自力で日々の生活を立て直すしかありませんでした。家族や知人を奪われたうえに住まいも働く場も失っていたからです。1945（昭和20）年の師走、中国新聞が市民1,000人に暮らしぶりを尋ねたアンケートには86%が「飢餓必至」と答えていました。政府からの配給は乏しく、人々は広島駅前をはじめ天満、己斐、横川、宇品の各町にできたヤミ市で食糧を求めたり、自身の持ち物を売ったりしました。



5-05 電車軌道の敷石とトタン板で作ったバラック 1948年 広島駅付近



5-06 被爆から半年後、広島駅前にひろがるヤミ市 1946年2月頃

●子どもたちと原爆

広島市内の国民学校は41校（分校場等を含む）ありましたが、原爆で全焼19校、全壊5校、半壊6校、使用可能はわずか11校という事態に陥りました。中等学校は30校のうち19校が全壊または全焼しました。

校舎が焼失した鞆町国民学校は1945年（昭和20）年10月、近くで焼け残った鉄筋の広島中央放送局を借りて授業を再開します。学校は放送局の復旧工事のため袋町の中央電話局へ移りますが、そこでも修理が始まると旧校地に戻り、校庭に机や椅子を並べる「青空教室」となりました。平屋のバラック校舎は翌年7月にできましたが、教室が足らず2部授業の交代制でした。

学童疎開先などで親の原爆死を知り孤児となった児童も多数いました。厚生省の1947年「全国孤児一斉調査」によると広島県は最多の5,975人に上りました。仏教者によって1945年末、市郊外の五日市町（現佐伯区）に広島戦災児育成所が開かれ（1953年市に移管）、市沖合の似島には1946年9月、県戦災児教育所似島学園が開設されました。



5-07 焼け跡の校庭で行われた鞆町国民学校の「青空教室」。校庭では児童らがサツマイモも育てた 1946年2月頃



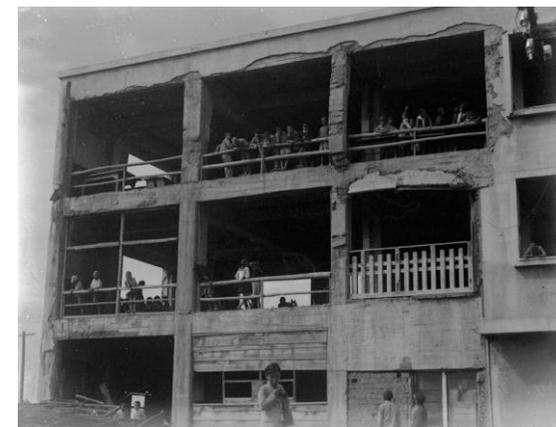
5-08 被爆2日後、比治山国民学校に設けられた「迷子収容所」の乳幼児。後列の女性2人は母親代わりとなった同校教諭。引き取り手が現れなかった16人は1946年2月、広島戦災児育成所へ移った 1945年秋



5-10 食卓に着く広島戦災児育成所の子どもたち 1947年



5-09 広島戦災児育成所内の童心寺では、原爆死した親きょうだいらのめい福を祈り、子どもたちが朝晩に読経もした 1947年



5-11 焼け残った鉄筋の袋町小学校校舎の3階に間借りして1947年4月に開校した第五中学校（現在の鞆町中学校）。備品は白墨2本にバケツ3個、ほうき5本だった 1947年頃

海外からの支援

赤十字国際委員会駐日首席代表のマルセル・ジュノーは広島壊滅翌月の9月8日、米軍のマンハッタン管区調査団に同行して広島に入り、連合軍総司令部（GHQ）と交渉して入手した約15トンの医薬品を広島県に提供しました。

食糧や衣服すら乏しい日本に対し、米国の宗教・慈善団体が組織した「アジア救援公認団体（LARA）」が1946（昭和21）年11月、大量のララ物資を送り、広島へも届きました。

広島への海外からの救援物資や支援金の送付は、全国最多の移民県として海外に送り出した移民の日系1・2世が担い手でした。1948年4月、ハワイでは「広島県戦災民救済会」が結成され、6月までに11万3000ドル（当時4,068万円）を集めます。9月、まず9万ドルが届き、県と広島市が折半。市は母子寮4棟や老人養護施設を建てました。

大戦中の強制収容を経てカリフォルニア州西海岸に戻った人たちの「南加広島県人会」は1948年、広島戦災児育成所や似島学園などに救援物資を送付。1950年5月には図書館建設費用として400万円が送られ、これにほかの寄付や市費を加えて児童図書館が基町に建設されました。南米ブラジルの広島県出身者も1950年、「原爆孤児救済会」を結成し、救援物資を市内6施設を含む8施設に送り、アルゼンチン広島県人会は1951年、復興資金約67万円を広島市に寄せました。

日系人・日系社会による被爆地ヒロシマへの支援は現地メディアで取り上げられ、キリスト教徒らを中心に米国から支援の輪が広がっていきます。

ニューヨークで発行する週刊文芸雑誌「土曜文芸評論」の主筆だったノーマン・カズンズは1949年8月に広島を訪れ、「4年後のヒロシマ」と題するルポで、原爆で身寄

5-13 広島戦災児育成所の子どもたちとノーマン・カズンズ
1949年8月



5-12 ハワイから送られた寄付によって基町に建てられた母子寮 1948年頃



りを失った子どもの養育を手助けする「精神養子」を提唱し、月額2ドル25セント（810円）の送付を募りました。広島戦災児育成所から始まった「精神養子」は1953年末には400人を超えました。

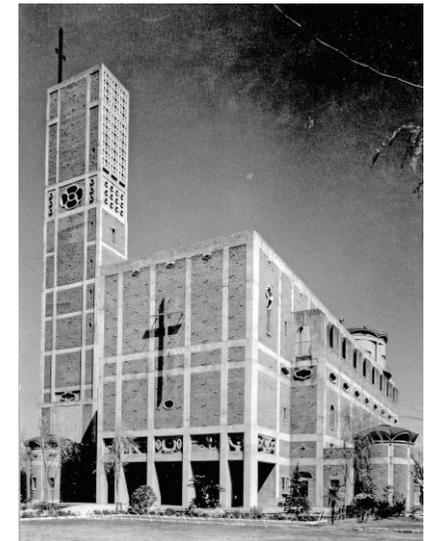
さらに、シアトルのワシントン大で森林学を学び、大戦中に強制収容された日系市民を支援したフロイド・シュモーは、1949年に黒人女性や日本人学生ら10人で広島を訪れ、皆実町の市営住宅敷地に長屋2棟を建て「平和住宅」として市に寄贈します。シュモーが率いた「広島の家」は1953年にかけて江波町、牛田町にも建てられ21棟を数えました。

戦禍から復興途上の欧州からも支援が差し延べられました。イエズス会・ドイツ管区から派遣され、幟町カトリック教会司祭館で被爆した神父のフーゴ・ラサールは1946年から1947年にかけて欧米や南米各国を回り、ヒロシマ救済を訴えます。「原爆犠牲者の追悼・慰霊」「世界平和の礎となる教会の建設」を国内外で呼びかけて1954年、世界平和記念聖堂は完成します。設計は村野藤吾。高さ45mの塔には西ドイツの鉄鋼会社から贈られた「平和の鐘」がつけられました。

世界平和記念聖堂は広島平和記念資料館とともに2006（平成18）年、戦後建築で初めて国の重要文化財に指定されました。江波に残る「シュモーハウス」は2012年、海外からの支援を伝える同資料館の付属施設となりました。



5-14 シュモーの「広島の家」プロジェクトによる江波町の市営住宅建設風景 1950年



5-15 完成した世界平和記念聖堂 1954年

被爆者の苦しみと援護

直接被爆した人々は、火傷や骨折等の外傷だけでなく放射線被ばくによる体調不良に長く苦しめられました。救援や家族の捜索で入市した人の中にも残留放射線の影響で体調を崩す人が多数いました。さらに、健康への不安やケロイドに向けられる視線、差別などは長く続き、被爆者を苦しめました。

1952（昭和27）年、ケロイドが残る若い女性たちが東京や大阪の大学病院で治療を受けたことが大きな話題となり、広島医師の間で「被爆者の治療は地元医師の手で」という機運が高まりました。こうして、県・広島市医師会、県、広島市、広島医科大学（現在の広島大学医学部）などが参加して、1953年1月、広島市原爆障害者治療対策協議会（原対協、現広島原爆障害対策協議会）を設立しました。原対協により被爆者の無料の診察会や生存被爆者4,000人の訪問調査が行われ、原爆傷害者の治療と健康指導、被爆障害の研究等に組織的に取り組まれることになりました。

米国が1954年、中部太平洋で行った水爆実験によりマグロ漁船第五福竜丸の乗組員23人が「死の灰」を浴びたビキニ被災の被爆を機に、原水爆実験の禁止を求める動きが国民的なうねりとなり、初の「原水爆禁止世界大会」が翌年に広島市で開催されます。復興が進む一方で社会の片隅に追いやられていた被爆者も声を上げ、1956年8月、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）を結成し、今日に続く活動を始めます。広島・長崎の各自治体や議会、選出の国会議員らも被爆者の支援を求める活動を後押ししました。



5-16 袋町国民学校に開設された救護所
1945年10月



5-17 原対協が初めて行った無料の診察会
1953年1月18日 広島市民病院

そうした動きが1957年の「原子爆弾被爆者の医療等に関する法律」（原爆医療法）の施行につながりました。被爆者健康手帳の交付が始まり、原爆被爆が起因となった疾病に対する医療を国の責任で行う措置が保障されます。

また、広島では1956年9月、日本赤十字社原爆病院が、お年玉つき年賀はがきの収益金の配分約7,000万円を充て設立されました。原対協は「原爆症治療センター」の建設を国に要望していました。原爆医療法の施行で「認定患者」は41都道府県にいたことが分かり、全国的な治療研究会が求められます。1959年、原子爆弾後障害研究会が広島市で開かれ、全国から34編の発表がありました。原爆特有の医学的影響を総合的に捉える研究会は今日まで続いています。



5-18 被爆者の健康診断 1958年10月21日

原爆医療法は、心身ばかりか生活基盤も根底から破壊された被爆者への援護にはほど遠いものでした。こうした問題を打開するため粘り強い運動が続けられ、1968年「原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律」（原爆特別措置法）が制定され、医療手当に加え特別手当、健康管理手当、介護手当等が支給されるようになりました。1995（平成7）年には、原爆医療法と原爆特別措置法を一体化した「原子爆弾被爆者に対する援護に関する法律」（被爆者援護法）が施行され、諸手当の所得制限が撤廃され、被爆者相談などの福祉事業が法制化されました。

●遅れた在外被爆者への援護

原爆には、日本が植民地支配した朝鮮半島からの就労や戦時下の徴用・徴兵から広島にいた多数の人々をはじめ、教育のために米国から戻っていた日系2世、旧満州（中国東北部）や東南アジアからの留学生、台湾出身者、中国人労働者らも遭いました。母国に帰ることができた人たちは窮状を訴えてきましたが、被爆者援護からは長年置き去りにされました。

1977 (昭和 52) 年、広島市の医師による在米被爆者の健康診断がようやく実現し、1985 年には、県が在米の被爆者健診を開始。海外最多の在韓被爆者は日韓両政府による渡日治療が 1981 年から 5 年間行われました。

「被爆者はどこにいても被爆者」。韓国原爆被害者援護協会（現韓国原爆被害者協会）の創設メンバーが健康管理手当の支給を求めた訴訟で、日本政府は上告を断念した翌 2003 (平成 15) 年、諸手当の海外送金を開始。在外被爆者はその後も訴訟を通じて援護の拡大を実現していきました。

●黒い雨



5-19 爆心地から 3,700m の古田町高須の民家の白壁に残る黒い雨のあと

1945 (昭和 20) 年 8 月 6 日、米軍が投下した原爆で、広島市の上空には、巨大な原子雲 (きのこ雲) がわき上がりました。約 20 分後からは、放射性物質を大量に含む「黒い雨」が降り始めました。特に市内の西部 (己斐・高須方面) と北部 (可部方面) では土砂降りの豪雨となったことが記録されています。

国は 1976 年、気象台の技師が大雨水域と報告した爆心地から楕円形の長径約 19km、短径約 11 km に限って援護区域とし、その区域外で「黒い雨」を浴びた人々は援護の枠外にされました。

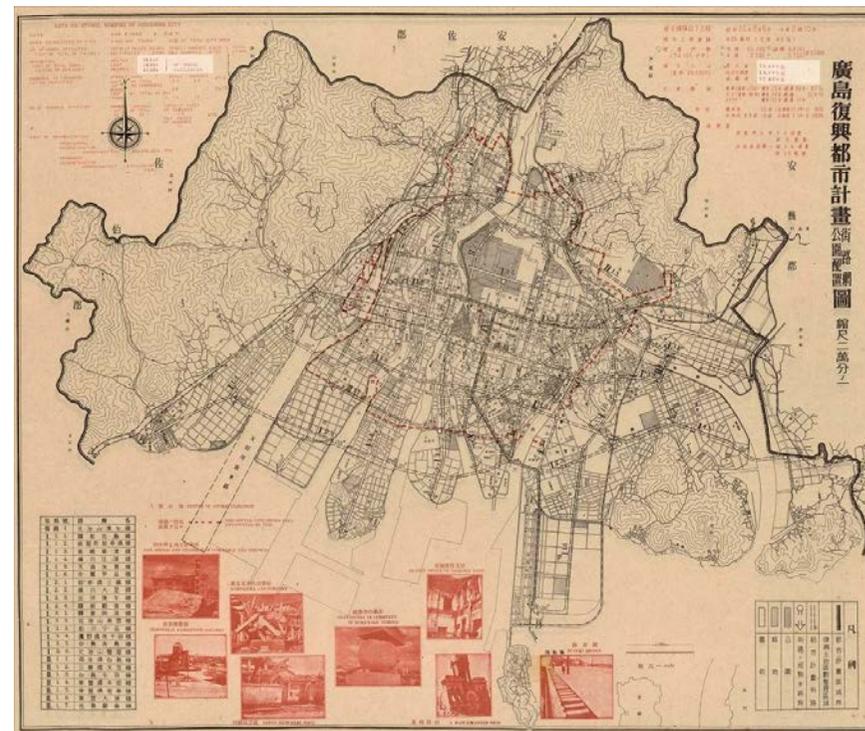
広島市は 2010 (平成 22) 年、積み上げられた研究成果や、住民の「原爆体験者等健康意識調査」を踏まえ、県とともに援護区域を約

6 倍へ広げるよう国へ要望。被爆者健康手帳の申請を却下された住民の集団提訴で、政府は 2021 (令和 3) 年に上告を断念し、翌年から新たな認定指針の運用を始めました。これにより新たに「被爆者」と認定され、援護を受ける人が増えました。一方で、申請を却下されるケースもあり、却下されるなどした住民の訴訟が続いています。

都市の再建

城下町であった戦前の広島は、格子の町割りと狭い道路が特徴の街でした。広島復興計画では、大幅な街路の拡幅が要点となりました。

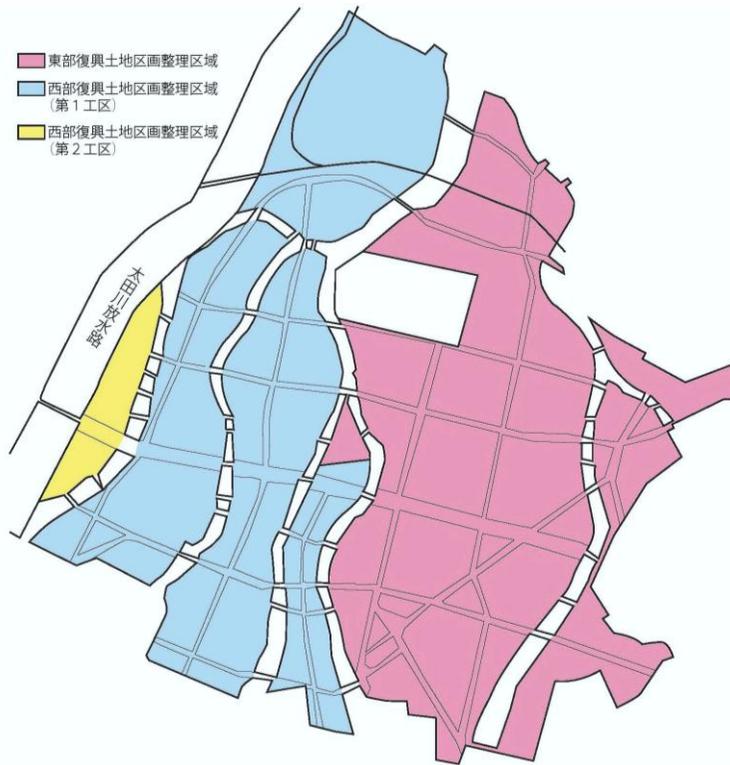
戦災からの復興を進めるための都市づくりの設計図として、広島県と広島市が中心となって検討した復興都市計画は、1946 (昭和 21) 年 10 月と 11 月に、都市計画街路や都市計画公園、緑地、墓地、土地区画整理事業区域などが決定されました。計画には、2 本の百メートル道路、中島公園 (現平和記念公園)、広島城跡の中央公園、東練兵場跡の東公園の三つを中心として公園を整備することなどが組み込まれていました。しかし、資金難などから計画はなかなか進みませんでした。



5-20 広島復興都市計画街路網公園配置図 1946 年 12 月 中央の赤い線で囲われた部分が全壊・全焼した地域。この計画に基づき戦災復興事業が進められた

復興都市計画に基づき、戦災復興事業として大規模な土地区画整理が行われ、計画地区の西部を広島県、東部を広島市が担当しました。

1946年に計画された戦災復興事業は、1972年に完了しました。この間、資金的事情や土地区画整理の問題などで住宅を再建できない人や再建にこぎついても換地のため解体・転居を余儀なくされる人も多数いました。住宅難のなかで河岸緑地や公園の予定地等にバラックを建てて住む人もいました。中でも基町の本川（太田川）東岸の河岸地帯には、後に「原爆スラム」とも呼ばれることになる応急的な住宅群も生まれました。戦災復興事業は住民にとっては苦しみを伴うものでもありました。



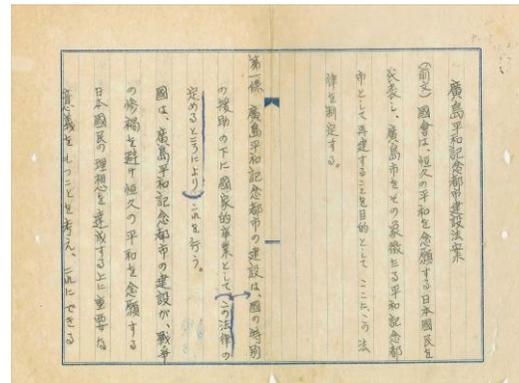
5-21 街路割図 赤く塗られている部分は市が担当した東部復興土地区画整理区域、青は県が担当した西部復興土地区画整理区域。黄色は西部のうち後で施行された区域

広島平和記念都市建設法の成立

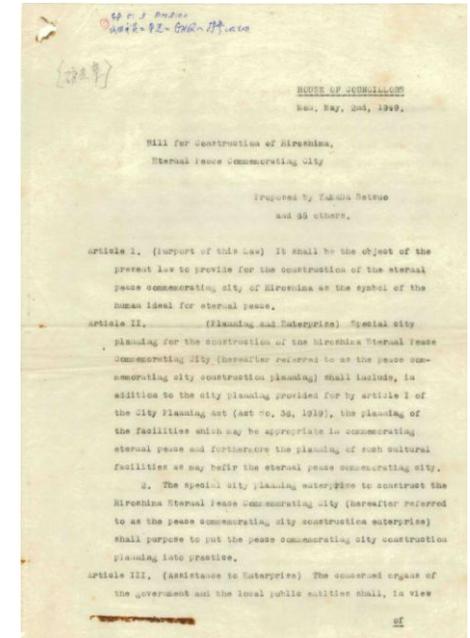
壊滅的な被害を受けた広島では、人口の急減や建物の壊滅などから財源となる税収が激減し、財政的に困難な状況にありました。自力で復興することは極めて難しく、国からの特別な財政的援助が不可欠でした。

広島市では1946年（昭和21年）から西練兵場等の旧軍用地の払い下げを求める様々な要望活動を国に対して行いましたが、全国の戦災都市の中で広島市だけを特別扱いできないことを理由に、支援を得ることはできませんでした。

そこで、広島の復興を単なる戦災復興ではなく、「平和記念都市」の建設という新たな理念を掲げた復興とする特別法「広島平和記念都市建設法」の制定が構想されました。



5-22 広島平和記念都市建設法の第一次案。広島出身で当時参議院議事部長を勤めていた寺光忠が起草した 1949年



5-23 GHQ説明用の広島平和記念都市建設法確定案の英語版 1949年5月
「49.5.3 pm2:00 山田ギ員と寺光とGHQへ持したも」というメモがある

1949年5月、この法律は国会の衆参両院において満場一致で可決され同年、7月7日、広島市で法律制定の賛否を問う住民投票が行われ、投票率65%、賛成9割で成立、8月6日、公布・施行されました。



5-24 広島平和記念都市建設法案の衆議院可決を見守る浜井市長（2列目右2番目）と楠瀬常猪県知事（同3番目） 1949年5月10日



5-25 焼け焦げた跡が残る広島市役所庁舎前に立てられた住民投票を呼び掛ける看板。窓ガラスも割れたままになっている 1949年6月頃

広島平和記念都市建設法第1条には、「この法律は、恒久の平和を誠実に実現しようとする理想の象徴として、広島市を平和記念都市として建設することを目的とする。」として、広島市を恒久平和を実現する理想の象徴と位置づけ、単に戦災から復興するだけでなく、平和記念都市として建設することがうたわれています。

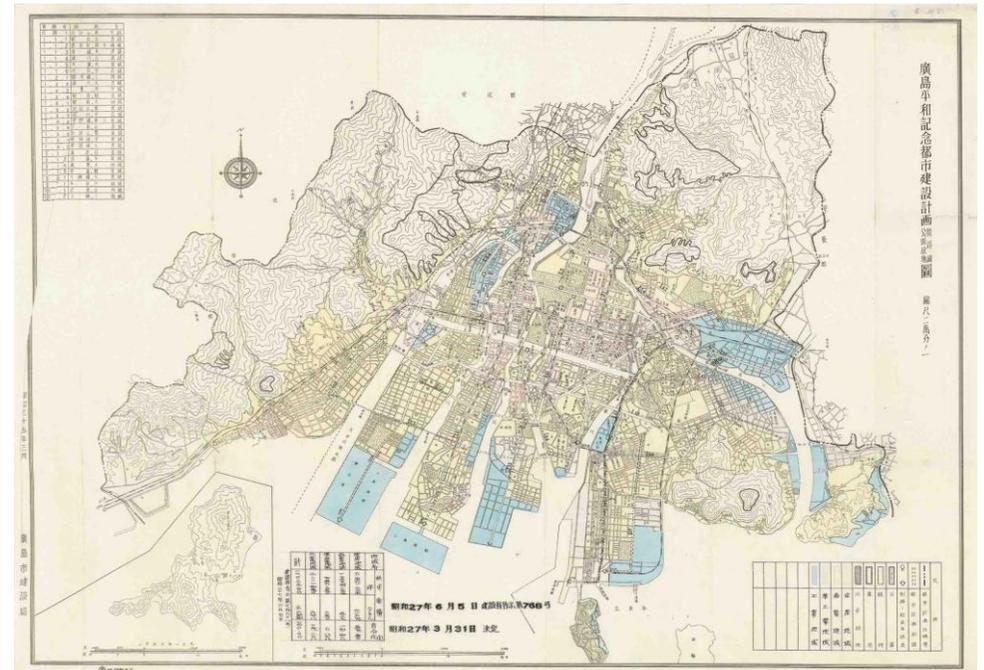
この法律の成立により、戦災復興事業に関する国からの支援の増大、旧軍用地等の国有財産の無償譲渡や無償利用等が可能となり、道路・橋梁・住宅などの整備が本格的に進むこととなりました。また、文化施設の建設にも国の支援が得られることになりました。



5-26 大芝小学校の住民投票風景 1949年7月7日

法律の主な内容

- 1 平和のシンボルとして広島市を平和記念都市として建設する。
- 2 平和記念都市としてふさわしい文化的施設を作る。
- 3 国と地方公共団体の関係機関は、この事業が促進・完成できるようにできる限りの援助を与える。
- 4 国は、平和記念都市建設に必要であると認められる場合は、無償で国有財産を与えることができる。
- 5 広島市長は住民等の協力を得て、広島市を平和記念都市として完成させるため、絶えることなく努める。



5-27 1952年に決定された広島平和記念都市建設計画図 都市計画街路、公園、緑地、墓苑、河岸緑地等が記されている

復興する街並み

広島平和記念都市建設法による国からの戦災復興補助金の増額を弾みに、市街地の復興は進みました。この6枚の写真は、いずれも1945（昭和20）年秋以降の市街を、中国配電（1951年に中国電力）本店屋上から撮影したものです。中央左奥には原爆ドームと相生橋が、右下には紙屋町から宇品港に向かう宇品線の電車通り（現在の鯉城通り）が写っています。建物が建ち、平和大通りが整備されていく様子が分かります。



5-28 1945年秋 鉄筋コンクリート造の建物などが一部残るだけで、一面が焼け野原となっている



5-29 1946年4月 焼け跡に雑草が生え、バラックが立ち始めている



5-30 1947年11月 空地在耕され畑となる。電車通りが拡張されようとしている



5-31 1949年7月 百メートル道路の工事が始まった



5-32 1950年4月 とてつもなく広い道路が姿を現す



5-33 1953年2月 百メートル道路の工事が進み、本線と両側のグリーンベルト等が分かる



5-34 昭和町の「平和アパート」 1951年12月20日

平和記念都市建設法制定後、昭和町には「平和アパート」が市営住宅として初めて鉄筋コンクリート造で建設されました。



5-37 紙屋町交差点と「マッカーサー道路」(現在の鯉城通りの一部) 1952年9月30日

紙屋町には元軍用地を貫通して幅員40mの道路(現在の鯉城通りの北端部分)が新設され、1949年5月には、イチヨウヤクスノキが植栽されたグリーンベルトが姿を現しました。



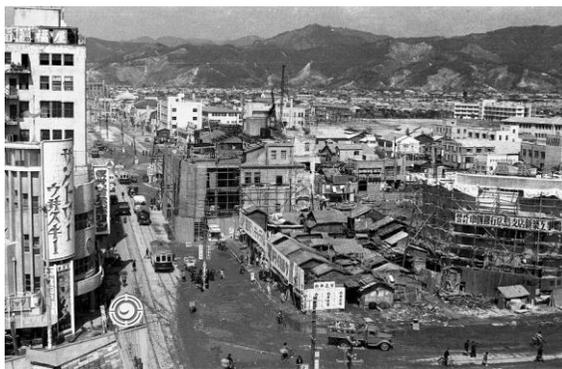
5-35 平田屋川の埋め立て工事 1952年5月8日

江戸時代から城濠や水運用水路として活用された人工の川「平田屋川」は、道路や宅地として整備されることになり、下水管を敷設して埋め立てられました(現在の並木通りなど)。



5-38 紙屋町交差点 1958年6月24日

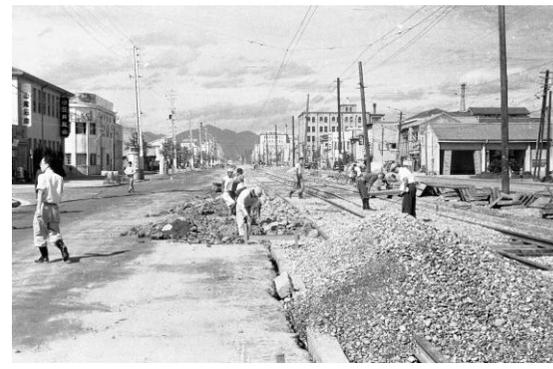
1957年7月には、紙屋町交差点西側に広島バスセンターが完成しました。1958年の写真では、その後方に、この年復元された広島城天守閣が見えます。



5-36 八丁堀一帯、電車通りの道路拡張工事 1953年7月21日

区画整理の進展に伴い、市内中心部では道路の拡張工事が行われました。

百貨店福屋前の電車通り(現在の相生通り)では、幅員を広げるため住居や店舗(福屋日館等)が取り除かれ、電車軌道が道路の中央に移されました。



5-39 市役所前の電車軌道移設工事 1956年9月20日

広島市役所前の電車通りでも、道路を拡幅し、電車軌道を道路中央に移設する工事が行われました。



5-40 比治山から平和大通り（百メートル道路）を望む 1952年5月12日

●河岸緑地の整備

戦前、市内を流れる太田川の支流の河岸には、民家や料理屋等が建っていました。ここを街路や緑地として整備することは、戦後早くから提唱され、1952（昭和27）年6月に、広島平和記念都市建設計画で計画決定されました。河岸には、戦後直後に、とりあえずの敷地として家が建てられ、それが長期化しており、立ち退き対象となっても、立地の良さなどから移転しない人も多く、街路や緑地形成の妨げとなっていました。さらに建物からは川にゴミ、汚水等が流れ込み、汚濁が著しく進むなど、防災上、環境衛生上の観点からも課題となっていました。

広島市は市議会と一丸となって、これらの不法建築物の移転・除却を住民に働きかけましたがなかなか進まず、特に広島駅に近い猿猴川右岸の的場地区では街路形成でも大きな支障が生じていたため、1966年1月19日、ついに、商店等の強制的な撤去に踏み切りました。その後も「自力移転・除却」を基本方針として粘り強く住民と折衝するとともに、広報紙などによるPRに努めたところ、自主移転・除却の気運が高まり、ようやく不法建築物の撤去が進みました。

全国的に見ても、このような大々的な河岸緑地を実現させた例は珍しく、市民や土地所有者の協力があつたからこそ成しえたものと言えます。一方、立ち退き者の一部が基町の「相生通り」に移転するケースも見られ、新たな問題の原因となりました。



5-42 猿猴川河岸の不法住宅。猿猴川や京橋川では、川面に張り出した住宅が河岸を埋めていた 1966年



5-43 的場地区の強制代執行 1966年1月19日



5-44 強制撤去後のまだ不法住宅が残る的場地区の河岸 1966年



5-41 平和大通りの緑化 1957年11月
平和大通りのグリーンベルトや平和記念公園には、供木運動により県内外から緑化のために提供された樹木が植えられた

幅員100mの「百メートル道路」は、鶴見町から福島町に至る3,570m（橋梁を含む）の道路で、防災道路として、特にグリーンベルトの役割を有する空間として計画されました。「平和大通り」の名称は、1951年11月、市民から募集して決まりました。

計画当初はあまりに大きな幅員に市民から「住宅難にもかかわらず、どうしてこんなに広い道路が必要なのか」などの反発がありました。1955年4月の市長選挙では、幅員の削減が政策論争となり、百メートル道路の緑地帯の一部には鉄筋製のアパートを建設するなどの見直し案を掲げた渡辺忠雄が当選しました。就任後は訴えを見直し、緑化を図る供木運動を進展させました。

●基町地区の再開発事業

広島城を取り巻く基町地区は、軍事施設が密集していましたが、爆心地から近く、軍の施設は全焼、天守閣などは倒壊し、壊滅的な打撃を受けました。

戦後、軍が解体され、国が管理する広大な軍用地が残されました。広島市は基町地区の旧軍用地について、東半分を官公庁施設に、西半分を公園用地とする計画を立てましたが、住宅の欠乏を補うことが優先されたため、旧軍用地を国から一時借り受け、1946（昭和21）年6月、戦災者向けの緊急住宅を建設しました。続いて市営住宅、県による引揚者住宅など住宅の建設が次々と進められました。



5-45 基町に建設中の市営住宅 1948年

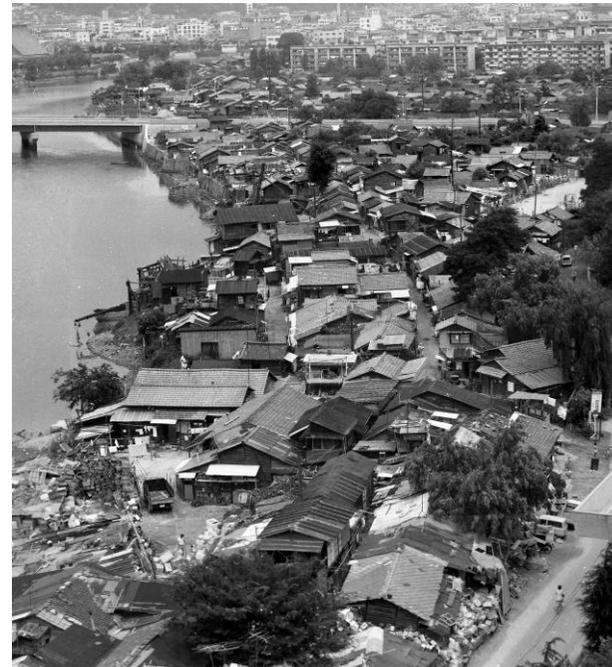
1952年に策定された広島平和記念都市建設計画においても、広島城址とその周辺の約58.74ヘクタールを中央公園とし、公園内にレクリエーション施設や文化施設を配置することが計画されましたが、市外に疎開していた人々の復帰、復員者・引揚者や新たに転入する人も多く、住宅はますます不足し、公園整備は後回しとなりました。



5-46 広島市民球場建設直前の基町一帯 1957年

河岸緑地や公園が計画された本川（太田川）東岸の土手や河岸には堤塘敷^{ていとうじき}と呼ばれる一定面積の土地があり、ここに土地を持たない人や立ち退き等で移転を余儀なくされた人々がバラックを建て始め、1960年頃には900戸に及びました。

この地区は「相生通り」とも「原爆スラム」とも呼ばれるようになり、他地区の復興が進む中、1970年代までバラック等の不法住宅が残されました。



5-47 「相生通り」と呼ばれた基町の本川東岸地区 1970年頃

当初、公営住宅を中層住宅に建て替えて公園を整備することも検討されましたが、家賃が高くなり低所得者が入居できない、民間住宅の住民が対象から除かれることなどから、住民から反対があり、前に進みませんでした。1967年7月、本川土手付近の149戸が焼失する火災が発生し、結局これがきっかけとなってこの地区の再開発の方法があらためて検討されることになりました。

こうして、基町地区の再開発は、単なる公営住宅の建て替

えでなく、高層住宅を建設して老朽化した市営住宅や川土手に建てられた不法住宅の居住者を入居させ、不法住宅等を除却して公園や河岸緑地を整備する方法で行うことになりました。1969年3月、広島県と広島市は基町地区の再開発事業に着手、事業は1978年9月に完了し、これにより広島戦災復興事業は完了しました。



5-48 老朽住宅が密集した再開発前の基町・本川土手では火災が起きるとたちまち燃え広がった 1967年7月27日



5-49 完成した基町および長寿園高層アパート群 1978年11月

●広島復興大博覧会の開催

1958（昭和33）年4月1日から5月20日までの50日間、広島市の主催で、復興の状況、産業・観光の実情などを広く紹介することを目的に、広島復興大博覧会（復興博）が開催されました。会場となった平和記念資料館、平和大通り一帯には、復興館、交通科学館、宇宙探検館、原子力科学館などの29のパビリオンが開設されました。



5-50 復興博覧会メイン会場となった平和記念資料館 1958年4月

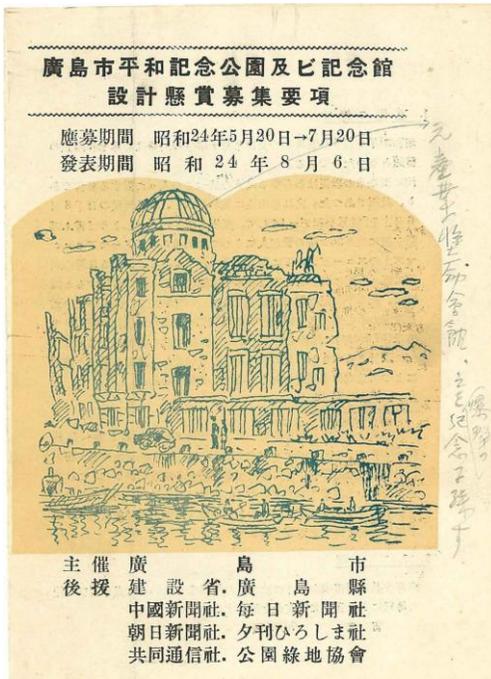
広島城跡には、鉄筋コンクリート造の天守閣が再現され、郷土館として使用されました。広島城天守閣は復興大博覧会后、広島の主に関世に関する歴史資料を展示する博物館として整備されました。

この年広島市の人口は戦前の水準である41万人まで回復しましたが、復興博会期中の来場者数は約88万人となり、市民生活面で復興を実感できるイベントとなりました。



5-51 復興博を機に復元された広島城天守閣 1958年

平和のデザイン



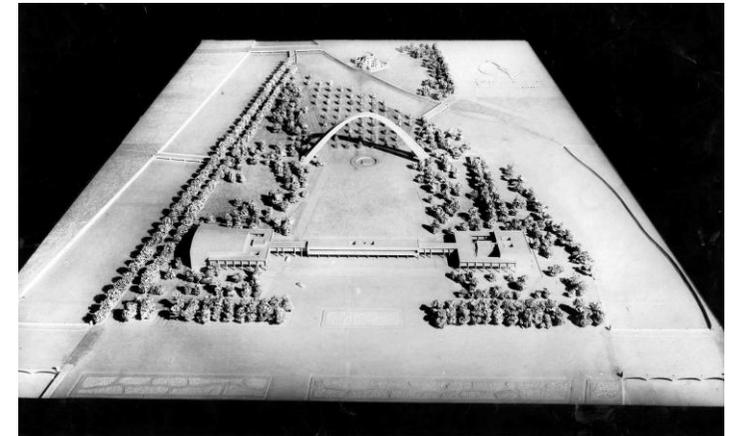
5-52 平和記念公園等の設計競技の募集要項
1949年

丹下のデザインでは、百メートル道路（平和大通り）を前に、陳列館（広島平和記念資料館）を正面に見るように立つと、平和記念資料館1階の空間（ピロティ）と慰霊施設であるアーチの塔を透かして原爆ドームが見通せるように施設が配置されていました。

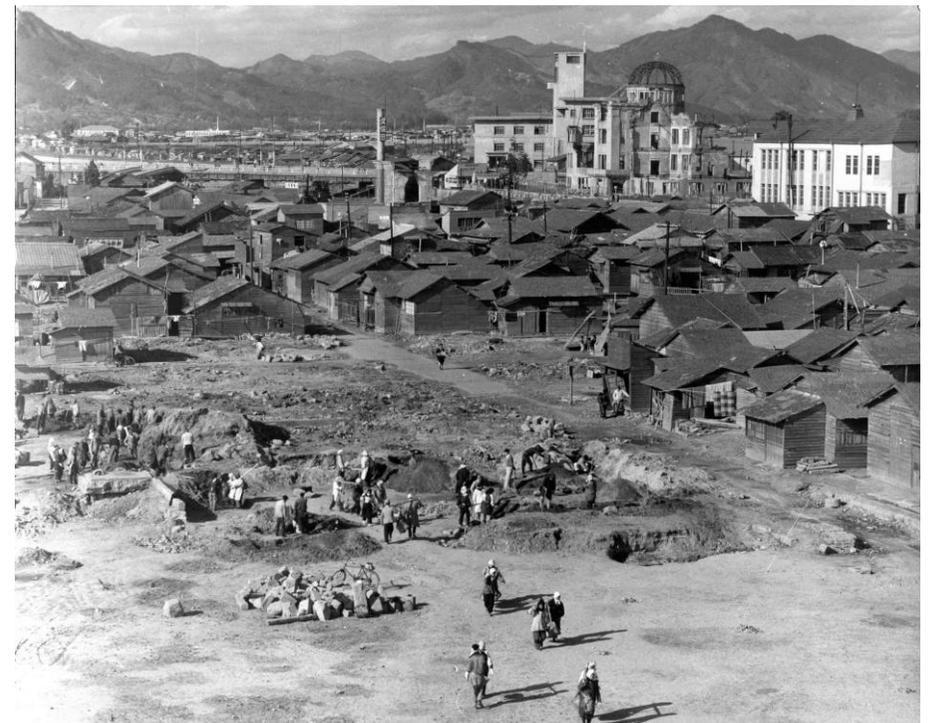
この平和記念資料館、慰霊のアーチ、原爆ドームを一直線上に配置したデザインは「丹下の軸線」とも呼ばれています。丹下の構想に基づく南北軸と平和大通りの東西軸は「平和の軸」として広島の街づくりをする上で、その理念が現在も継承されています。

かつて繁華街であった中島地区は、現在平和記念公園となっています。

1946（昭和21）年11月に決定された都市公園の復興都市計画では、中島地区を公園として整備することが計画決定されていましたが、広島平和記念都市建設法を制定する動きの中で、中島地区を「平和記念公園」として整備することとなり、広島市はその設計を広く設計競技（コンペ）にかけることにしました。1949年5月に募集を開始し、7月20日の締め切りまでに145点を超える案が提出され、当時東京大学建築学教室助教授であった丹下健三グループの案が1位に選ばれました。

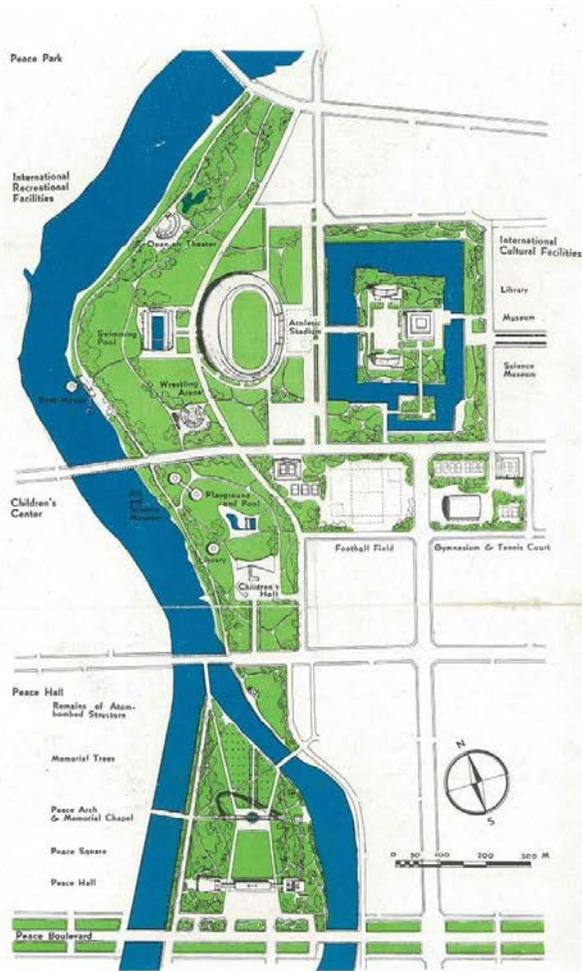


5-53 丹下グループの
平和記念公園設計
競技当選案の模型



5-54 整地が進む平和記念公園 建設中の平和記念資料館から撮影。公園予定地にはまだ多くのバラックが残っていた 1952年

CENTRAL THEME OF HIROSHIMA CITY PLANNING



PEACE PARK PROJECT

Designed by:
Kensro Tange, Takashi Asada, Sachio Otsui
and their associates of the Planning Research
Group, Architectural Department, Tokyo University.

Our city planning is a planning for construction of a peace city as the symbol of the human ideal for eternal peace as well as a planning for reconstruction of human life. Therefore we have launched a program of constructing peace facilities, as the central theme of city planning, and also housing, working, recreation and transportation facilities. Hiroshima which had a population of 136,000 at the close of war had increased its population to 270,000 (as of Dec. 1949). The problem of housing shortage is still acute. Although numerous temporary homes have been erected, these are far from meeting actual needs. However, construction of ferro-concrete apartment houses, though of a crude nature, has gotten underway in recent months, bringing new light and hope into the lives of many.

Despite all hardships, we of Hiroshima are daily becoming more resolute in our conviction that peace is not only desirable but imperative, and in our determination to establish a peace city symbolic of the human ideal for eternal peace.

Hiroshima no longer belongs to the people of Hiroshima or Japan alone. It belongs to the whole human society. This is the spirit which lies at the core of Hiroshima's city planning. The central theme of Hiroshima city planning program, therefore, lies in the ultimate creation of a city whose facilities would be of real service to mankind in its pursuit of peace and happiness. The following is a brief description of the important peace projects contemplated by the City of Hiroshima.

5-55 丹下が描いた Peace Park 構想。平和記念公園に加え中央公園に文化・スポーツ・レクリエーション施設を配置している (パンフレット「Peace City Hiroshima」より) 1950年



5-56 平和記念式典が営まれた1955年8月6日の平和記念公園。奥左から平和記念館、平和記念資料館、公会堂。手前にはまだバラックが残っている 1955年

・広島平和記念資料館（陳列館）

陳列館は一等賞となった丹下グループの案により建設され、平和記念資料館（原爆資料館）として1955年8月24日開館しました。初代館長に就いた長岡省吾が壊滅直後から収集した熱線を刻む瓦や磁器、記録写真をはじめ、市民から寄せられた遺品などを常設展示し、被爆の実態を伝える場として重要な役割を担っています。

平和記念資料館の建物は国際的に高い評価を受けた最初の戦後建築であり、丹下健三の出発点となる重要な建築物であることから、2006（平成18）年7月5日、重要文化財に指定されました。



5-57 開館当時の平和記念資料館 1955年8月

・平和記念館（記念館）

平和記念館も丹下グループの案により建設されました。

記念館は1955年6月1日開館しました。展示室のほか260席のホール、会議室、図書室等を備えており、展示室やホールで多彩な行事を開催するとともに、平和行政の一翼を担う施設となりました。

1986年6月、企画展示室や収蔵庫等を備えた平和記念資料館東館となり新装開館しました。



5-58 平和記念館 1962年3月13日

・広島市公会堂（集会場）

平和記念施設として計画された3施設のうち集会場は、どの都市にも共通する施設であるため国からの支援の対象となりませんでした。地元経済人らが資金を集め、広島の設計家が建築図面を描いて建設され、広島市に寄贈しました。

1955年3月、宿泊施設の新広島ホテルを併設して開館し、この年8月6日、第1回の原水爆禁止世界大会が開かれるなど、さまざまな催しに使われました。閉館は1986年。同じ場所に丹下健三の設計による広島国際会議場が1989（平成元）年に開館し、その役割を引き継ぎ、国内外の大会を受け入れる場となりました。



5-59 完成した広島市公会堂 1955年3月2日

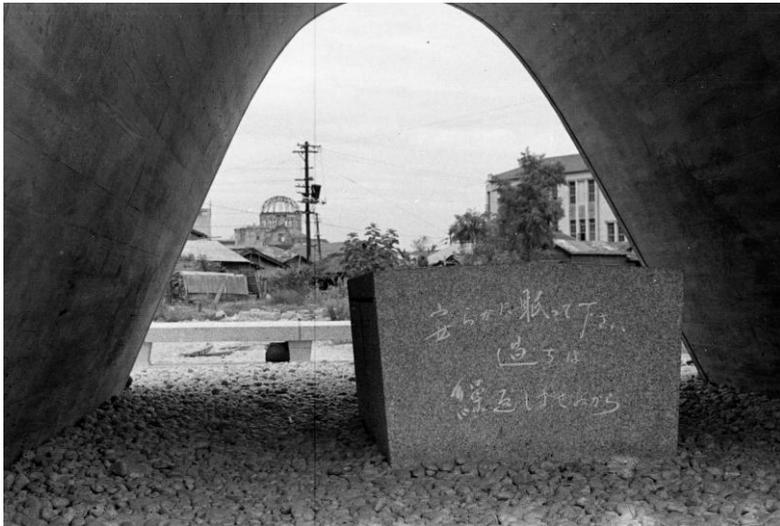
・広島平和都市記念碑（原爆死没者慰霊碑）

原爆死没者慰霊碑の正式名は広島平和都市記念碑といます。平和記念公園の設計競技案ではアーチに鐘を吊るすデザインでしたが、経費等の問題から埴輪型の現在のデザインとなり、1952年8月6日除幕されました。

慰霊碑内の石棺には、原爆を体験して亡くなられた人々を載せた「原爆死没者名簿」が納められています。2025（令和7）年8月6日現在の名簿登載者数は34万9,246名に上っています。



5-60 完成した原爆死没者慰霊碑 1952年9月16日



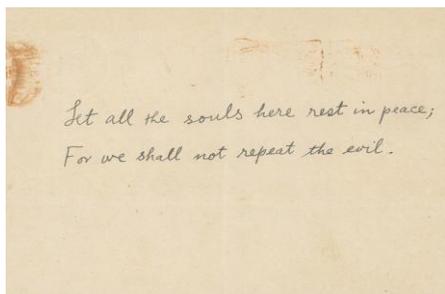
5-61 慰霊碑碑文 1952年8月21日

慰霊碑の石棺には

安らかに眠って下さい 過ちは繰返ませぬから

の文字が刻まれています。

碑文を作成した^{さいが}雑賀忠義広島大学教授から広島市職員に宛てたはがきには、その英訳が次のとおり記されていました。



5-62 碑文の英訳を伝えるはがき 1952年頃

Let all the souls here rest in peace;
For we shall not repeat the evil.

「we」は何を指すのか、長く論議されましたが、現在は「全ての人びと」と解釈されています。慰霊碑には国内外から多くの人々が訪れ、原爆死没者を慰霊し、祈りを捧げています。

・平和大橋

平和記念公園の入口となる元安川に架かる平和大橋、本川に架かる西平和大橋の高欄は、いずれも日系アメリカ人の彫刻家イサム・ノグチがデザインし、平和大通りを象徴する橋となっています。



5-63 平和大橋 1952年10月8日



5-64 西平和大橋の建設現場を視察するイサム・ノグチ（手前中央）と丹下健三（右端）
1951年11月27日



5-65 西平和大橋 1952年

・平和記念公園

平和記念公園は、平和記念館、平和記念資料館等の平和記念施設と並行して整備されましたが、公園予定地には民家があり、全て除去されるには時間がかかりました。



5-66 整備されつつある平和記念公園 1953年8月5日

1955年には平和記念施設も完成し、1958年には公園内にあった民家も立ち退き、公園がその姿を現しました。



5-67 平和記念公園全景 1958年7月31日

・慰霊碑等

広島では平和記念公園内をはじめ市内各所に原爆で犠牲になった人々を慰霊する各地域や学校、企業、団体等の慰霊碑があり、その一つに「原爆の子の像」があります。

1945年8月6日、2歳の佐々木禎子^{さだこ}は爆心地から1.6kmの自宅で被爆しました。奇跡的に無傷でしたが、広島市立幟町小学校6年生の冬、急に体調を崩して病院に入院しました。折り鶴を千羽折れば願いがかなうという言い伝えに触れ、同室に入院していた2つ年上の女性と病棟を回って薬の包み紙などを集めて鶴を折り続けました。しかし1955年10月25日朝、亜急性骨髄性白血病のため亡くなりました。12歳でした。

禎子の死の翌月、幟町小の元級友たちは、後に「広島折鶴の会」世話人となる河本一郎と「原爆の子の像」の建立を呼びかけるピラを全日本中学校長会研究協議大会が開かれた市公会堂入り口で配りました。当時、禎子のように被爆から年数を経ても、被爆が原因と思われる白血病等の病気で亡くなることもいることが報道されていたこともあり、運動は全国に広がり、募金が集まりました。

こうして1958年5月5日、平和記念公園の中に、原爆の子の像が完成しました。

像には今も多くの人々が訪れ、絶えず千羽鶴が捧げられています。



5-68 原爆の子の像除幕式 1958年5月5日

市民文化の再生と発展

●広島大学の開学

戦後、教育基本法、学校教育法が制定され、帝国大学・文理科大学が廃止され、新制大学が設立されることになりました。戦前「学都」とも呼ばれ高等師範学校を始めとする高等教育機関が集まっていた広島では、1949（昭和24）年5月、広島文理科大学を中心として、官立（国立）の広島高等学校、広島工業専門学校、広島高等師範学校、広島女子高等師範学校、県立の広島師範学校、広島青年師範学校、広島市立工業専門学校を包括し、新制の国立大学「広島大学」が誕生しました。

1953年には県立の広島医科大学を基盤として、広島大学医学部が発足しました。広島大学はその後、医学部・歯学部・薬学部を除きキャンパスを統合し東広島市へ移転しました。

女子の高等教育機関では、1949年に広島女学院専門学校を母胎として広島女学院大学が、翌1950年には、広島女子専門学校を母胎に広島女子短期大学（県立）が開学しました。



5-69 広島大学正門 1955～1960年頃

●文化施設の復興

・児童文化会館の開館

1946（昭和21）年6月、広島市内の小学校教師60人によって、広島児童文化振興会が結成されました。同協会は社会も学校の施設も荒廃していた時期に、こどものための文芸教室、科学教室、美術教室、音楽教室等を開催し、児童向けの読み物等を掲載した機関誌『銀の鈴』を発行しました。『銀の鈴』は一時全国一の発行部数を持つ児童向けの雑誌となりました。

児童文化振興会が、こども向けの文化センターを構想して建築したのが児童文化会館です。郊外の工場を移設して改修した同館は、原爆後に生まれた市内最初の文化施設として1948年5月、基町（現在のひろしまゲートパーク北側付近）に開館しました。大ホールには映写室・オーケストラボックス・大舞台を備えており、演劇、演奏会、映画上映、各種発表会等が行われたほか、大人を対象とするイベントも開催され、1955年に広島市公会堂が建設されるまで唯一の文化施設として重要な役割を果たしました。



5-70 広島市こどもまつり開催中の児童文化会館
1952年5月5日

●図書館の再開と開館

広島市立浅野図書館

戦前唯一の公共図書館であった市立浅野図書館は、爆心地から約730mの小町の位置にあり、被爆により外郭を残して全焼しました。1946（昭和21）年10月から比治山西麓の山陽文徳殿で、疎開して被災を免れた貴重書の閲覧を開始しました。1949年6月には元の小町の建物を修復して業務を再開し、7月には館内に児童図書館も設置されました。さらに1955年2月、国泰寺町に移転し新館を開館しました。

広島市児童図書館

1952年12月、カリフォルニア州の南加広島県人会から寄託された400万円などに市費を加えて、基町に「広島市児童図書館」が建設されました。平和記念資料館等を設計した丹下健三によるもので、円形のキノコ型、周囲がガラス張りというユニークな形が注目を集めました。



5-71 1952年に開館した市児童図書館

CIE 図書館

CIE 図書館は、戦後食糧、住居、衣料品等の生活必需品の確保が優先されるなか、市民へ文化サービスを提供するため連合軍司令部の民間情報教育局（CIE）が設置した施設です。広島では1948年10月、下中町（現小町）の県立広島第一高等女学校運動場跡に建設されました。無料で図書・雑誌の閲覧・貸出ができ、時には映画の上映も行われ、活字や映像に飢えていた市民の心を潤しました。CIE 図書館は連合軍の占領終了後、アメリカ文化センターとして再出発しました。



5-72 CIE 図書館 1952年頃

広島県立図書館

1951年、児童向け雑誌「銀の鈴」の出版社と広島県の協力で、CIE 図書館と同じ敷地に県立児童図書館が設けられました。県立児童図書館は1954年に広島県立図書館と改称、1960年には上流川町（現上幟町）の縮景園西隣に移転、新館が開館しました。

●美術館の開館

被爆前は産業奨励館等を会場に様々な美術展が開催されていましたが、多くは原爆により倒壊しました。被爆翌年の1946（昭和21）年には、わずかに焼け残った広島鉄道局の講堂（宇品）や広島市庁舎の市会議場（国泰寺町）、商工会議所等（基町）を使って展覧会が開催されました。



5-73 広島市庁舎の議場で開催された
平和復興美術展覧会 1946年8月

1947年に広島唯一のデパート福屋の催し会場が復活すると、デパートが会場となって大規模な巡回展が開催されました。1954年には天満屋広島店が加わり復興期のデパートは美術館の役割も担いました。

広島県立美術館

昭和30年代に入ると、美術館の建設を求める声が高まりました。こうした声を受けて、1968年9月、被爆前に観古館があった縮景園に隣接する場所に広島県立美術館が開館しました。



5-74 広島県立美術館 1968年9月

ひろしま美術館

1978年11月には、広島銀行が創業100年を記念して、ひろしま美術館を中央公園内に開館しました。ヨーロッパの印象派や日本の近代絵画等のコレクションを常時鑑賞できる美術館として、内外から多くの来館者を集めています。



5-75 ひろしま美術館外観

広島市現代美術館

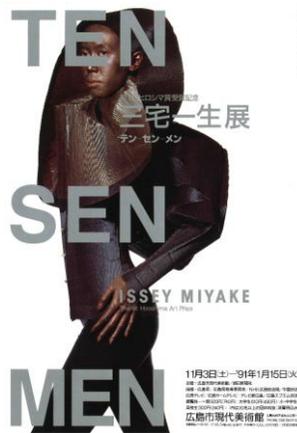
広島市現代美術館は、1989(平成元)年5月、全国で初めて現代美術に本格的に取り組む公立美術館として、比治山芸術公園内に開館しました。第二次世界大戦以降の現代美術の流れを示すのに重要な作品、ヒロシマと現代美術の関連を示



5-76 広島市現代美術館 1989年5月3日

す優れた作品、将来性のある若手の優れた作品を収集対象とし、市民に現代美術と触れ合う場を提供しています。

また、平和を願う「ヒロシマの心」を現代美術を通して表現している世界的な作家を顕彰する「ヒロシマ賞」(広島市が創設。3年に1度授与)の受賞作家の展覧会を開催しています。



5-77 第1回ヒロシマ賞受賞記念三宅一生展『TEN SEN MEN』チラシ

●音楽の復興

被爆、戦争により広島の音楽界も多くの人材や施設を失いました。原爆で市内の音楽会場はほぼ全滅し、戦後は残った宇品の鉄道局講堂を拠点に演奏会が開かれました。1946(昭和21)年2月には、その鉄道局講堂を会場に音楽鑑賞団体の広島音楽連盟の主催により、日本を代表するクラシック音楽の演奏家を招いて「戦災死没者追悼演奏会」が開催されました。広島音楽連盟はその後活動を定期化し、被爆により荒廃した街を音楽で活気づけました。

また、音楽喫茶ムシカは、1946年8月に開店し、音楽評論家による解説付きのレコード・コンサートや野外音楽会や音楽レクリエーションなどの音楽イベントを開催しました。クラシック音楽を中心に様々なジャンルの音楽を楽しむ場となりました。

復興の初期は、音楽を愛好する若者が活躍しました。広島高等学校や広島女子専門学校の学生を中心に1946年に発足した広島学生音楽連盟は、合同合唱団や管弦楽団を結成して音楽祭を頻繁に開催するほか、郡部の学校等を訪問して演奏会を開催しました。しかし学制改革による学校の廃止、再編などにより短期間で活動を終えました。



5-78 第2回学生音楽祭で歌う広島学生音楽連盟のメンバー
1947年11月16日 広島高等学校講堂

1948年には、1941年11月に結成された広島放送管弦楽団の一部が中心となり、広島放送交響楽団を設立しました。

学生などのアマチュアを交えた楽団でしたが、年2回の定期公演を行いました。こうした市民の活発なオーケストラ活動が下地となって、1963年10月、広島市民交響楽団が発足しました。1970年に名称を広島交響楽団（広響）に変更、1972年にはプロに改組し、中国四国地方唯一のプロのオーケストラとなりました。



5-79 広島市公会堂で開かれた広島市民交響楽団の第1回演奏会
1964年4月6日

また戦後まもなく、音楽を専門とする学校が相次いで設立されました。1948年には、幟町カトリック教会のエルネスト・ゴーセンス神父が広島音楽学校を開校、後にエリザベト音楽大学となりました。また1949年には、浄土真宗本願寺派安芸教区が主体となり広島音楽高等学校が開校しました。

広島の音楽文化は、原爆によって演奏家や指導者、会場等を失うダメージを受けながらも、被爆直後から少しずつ活気を取り戻していきました。

●スポーツの復興

戦争の影響はスポーツの分野にも影を落としました。戦前広島出身でオリンピック代表となったオリンピックのうちの4人が戦死・戦病死、1人が原爆症で亡くなりました。スポーツ施設やスポーツの場となった教育機関も原爆により大きな被害を受けました。そうした中、1945（昭和20）年12月には、現在の広島県総合グラウンドでラグビーの試合が開催されました。翌1946年7月には県体育協会が再建され、同年8月には、広島市体育大会が平和復興祭に合わせて開催されました。

この頃、場所も取らずに手軽にできるスポーツとして「ハネツキトリオゲーム」が広島で生まれました。後に「スポーツを通じた平和への希求」の願いを込めて「エスキーテニス（Education Science and Culture Institute Tennis）」と名称を改めました。現在も広島を中心に人々に楽しまれています。



5-80 本川小学校でのエスキーテニス 1949年

1949年8月には、広島で戦後初のスポーツの全国大会となる「マッカーサー元帥杯競技大会」が開催され、2,000人近い選手が集まりました。当時の市街にはガレキが残り競技場はありませんでしたが、これを機に、基町の旧西練兵場跡地に庭球場（テニスコート）と卓球場（後の中央公民館）が作られました。



5-81 庭球の試合会場（現広島市中央庭球場） 1949年8月

1948年2月には、中国駅伝も復活し、広島のスポーツ界は本格的に動き出しました。

1951年10月には、都道府県持ち回りの総合スポーツ大会「国民体育大会」の第6回大会が広島で開催されました。市民の暮らしに余裕はなく、国体開催の経費や施設の建設に充てるため、全国で初めて「国体宝くじ」が発行されました。開会式は県総合グラウンドで開催され、^{きよか}炬火リレーやマスゲームで大会を盛り上げました。この大会に合わせて基町に、中央排球（バレーボール）場が整備されました。このとき開催された体育文化博覧会では原爆で倒壊した広島城天守閣が木造仮設で再現され、1958年の天守閣復元への機運醸成につながりました。

1957年の第39回全国高等学校野球選手権大会（夏の甲子園大会、戦前の全国中等学校優勝野球大会）では、広島商業高校（広商）が法政二高を下し、戦後初の優勝（通算では4回目）を飾りました。

5-82 八丁堀の福屋前を通る広商野球部の優勝パレード 1957年8月22日



・広島カープの誕生

戦前の全国中等学校優勝野球大会では、広島商業、広陵中学校などが幾度も優勝し、広島は全国屈指の野球王国でした。1946年に再開されたプロ野球では、広島出身の選手が活躍しており、1948年2月に西練兵場跡で行われた阪神－南海のオープン戦でさえ2万5,000人が詰めかけるなど、プロ野球は広島でも人気を博していました。



5-83 結成披露式後の初練習 1950年1月15日

1949年4月、プロ野球の2リーグ化が打ち出されると、世界的な平和都市として蘇ることを宣言した広島の再建の一翼となることを願い、地元出身の国会議員や企業関係者等が協力してプロ野球球団「広島野球倶楽部（球団名カープ）」を設立しました。

こうして1950年3月スタートしたカープですが、特定企業の親会社を持たず広島県や広島市等の自治体からの補助金や企業の協力金により運営する体制では、初年度から経済的に行き詰まりした。一時は他球団への身売りも決まっていたが、当時の石本秀一監督が後援会づくりによる打開策を提案したことから、存続が決定しました。市民等は後援会づくりや株券の購入、球場入口に置かれた酒樽への「たる募金」、寄付等で応援し、1951年度の収支は黒字となり、息を吹き返しました。

1957年には、地元財界からの寄付により、基町に、ナイター設備のある「広島市民球場」が建設され、カープの本拠地となりました。

その後の幾度もの経営危機を乗り越え、1975年、念願のセ・リーグ初優勝を果たしました。



5-84 市民が寄せた募金を受け取る石本監督 1951年4月 県営総合球場



5-85 広島市民球場全景 1957年7月22日



5-86 カープ初優勝の平和大通りでの優勝パレード。約30万人のファンが詰めかけた 1975年10月20日

・サンフレッチェ広島

広島では戦前からサッカーも盛んでした。とりわけ県立広島第一中学校（広島一中）が全国大会で何度も優勝し、戦後も広島一中を母体とした新製の鯉城高校（現国泰寺高校）が1948年に全国高等学校サッカー選手権大会を制し、修道高校が1952年と1961年、これに続きました。また東洋工業（現マツダ）は、実業団チームによる日本リーグが結成された1965年から4連覇を果たしました。広島はメキシコオリンピック（1968年開催）頃まで、埼玉・静岡とともに全国三強の位置を占めていました。

日本でプロサッカーリーグ（Jリーグ）が発足する前年の1992（平成4）年4月、マツダが筆頭株主に県、広島市なども出資したプロのサッカークラブ「サンフレッチェ広島」が誕生しました。サンフレッチェは、1994年Jリーグ第一ステージで優勝、また、2012年にはリーグJ1で初優勝を飾りました。広島交響楽団、カープとともに「広島三大プロ」の一つとして活躍を続けています。



5-87 J1初優勝を決めたサンフレッチェ広島 2012年11月24日

2013年に設立されたプロバスケットチーム「広島ドラゴンフライズ」は、2024（令和6）年5月、BリーグB1で初優勝しました。また、実業団バレーボールチームとして戦前から活動する「広島サンダース（旧専売広島）」は、Vリーグで活躍しています。

●広島アジア競技大会の開催

1994（平成6）年10月2日から16日まで、広島市を中心に、第12回アジア競技大会広島1994（アジア大会）が開催されました。首都以外の地方都市で開催されたのは初めてで、アジアの42の国と地域が参加し、総来場者数111万8,591人を数えるスポーツイベントとなりました。

アジア大会では、開会式・閉会式、陸上競技等が行われた広島広域公園陸上競技場（ビッグアーチ、1992年完成）、水泳競技が行われた広島市総合屋内プール（ビッグウェーブ、1991年完成）などの施設の整備に加え、アジア諸国・地域への理解を深めるため、市内の地域ごとに公民館・集会所が中心となり、各国・地域の選手を支え・応援する「一館一国・地域の応援事業」が繰り広げられました。この取り組みによって絆が生まれた公民館では、大会終了後も、各国・地域等との交流が続けられました。「一館一国・地域の応援事業」の取り組みは、後の長野冬季五輪の「一校一国運動」や1996年に開催された2巡目となる広島国体の「1市町村1スポーツ運動」に生かされました。



5-88 アジア大会開会式の集団演技 ビッグアーチ 1994年10月2日